

Reflection 9

ICIS Newsletter, Kansai University



Contents

| | |
|--|----|
| 天草フィールドワーク2011活動報告 | 2 |
| 国際シンポジウム 「周縁と中心の概念で読み解く 東アジアの『越・韓・琉』」 .. | 4 |
| 東アジア文化交渉学会第3回年次大会..... | 6 |
| RA活動報告/ASCJ・WHA参加レポート..... | 7 |
| 第5回国際シンポジウム..... | 8 |
| コラム/神サマたちの「越境」 | 9 |
| 活動報告..... | 10 |
| 紀要募集要項..... | 11 |

ICIS

文部科学省グローバルCOEプログラム
関西大学文化交渉学教育研究拠点

Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University



ICIS周縁プロジェクト 天草フィールドワーク2011活動報告

荒武 賢一郎（文化交渉学教育研究拠点・助教）

関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）の「周縁プロジェクト」は、2010年度に引き続いて2011年7月25日から8月1日の日程で、熊本県天草諸島の総合調査を実施した。

調査の概要

周縁プロジェクトでは、教員・研究員・大学院生の共同作業として2年間に及ぶ天草諸島の総合調査を計画した。2010年の概要はニューズレター7号で紹介し、まとまった研究成果としては『周縁の文化交渉学シリーズ2 天草諸島の文化交渉学研究』（2011年3月刊）を発表している。

今年度は、教員・研究員5名、大学院生13名の総勢18名でフィールドワークに臨んだ。昨年同様、調査班を5つ（地理・文学・集落・交流・生活の各グループ）に分けた。また、班長（教員・研究員）をのぞく大学院生は、多様な研究方法を習得するために複数のグループに所属する形態を採った。昼間は分かれて行動をするが、夕食後にはデータ整理作業と全体ミーティングを実施し、各班の成果を共有しながらメンバーの意思疎通をはかる努力をした。

調査地域の特徴

天草諸島は、いわゆる「平成の大合併」で行政自治体が2市1町（天草市・上天草市・苓北町）に集約された。当地を訪れた誰しもが感じることだが、天草は思ったより広い。たとえば天草市内で移動をするにも、市役所のある本渡から南部の牛深へ自動車でも1時間はかかる。

地元の人々にインタビューをすると、隣の地域とは言葉が、お祭りが、そして料理が違う、といった具合である。当たり前のことだが、一口に天草と称しても、そのなかにある地域、集落で独自の姿がみえてきた。その点は、昨年の調査で得た成果であり、今年は地域にこだわって、しかもひとつだけではなく、できるだけ多くの町をみていくことにした。

①牛深調査

今回、もっとも時間をとり、調査人数をかけたのが、天草市牛深町である。天草で漁業といえば牛深、といわ

れるように水産業で有名な港町だ。ここでは、地元の皆さんの助力を得て調査を実施した。特筆すべきは真浦・加世浦地区（漁業集落）のフィールド調査、そして牛深八幡宮の古文書調査であろう。真浦・加世浦の空間的特徴は「せどわ」である。道幅1メートルにも満たない細い小道が集落全体にめぐらされている。外部の人間が入ると、途中で方向がわからなくなるほど、民家がひしめきあっていた。



牛深加世浦地区のせどわ

牛深八幡宮では、貴重な古文書を実見することができた。神社や寺院の古文書は、宗教的価値もさることながら、地域の成立を読み解くヒントを与えてくれる。当地の歴史にも詳しい田代壽興宮司の丁寧な解説とともに、牛深の地域性について多くの知見を得た。

②伝承されていく地域文化

文学班が着手したのは、「郷土史」「地域新聞」の調査であった。濱名志松五足の靴文学資料館（天草市大江）は、天草で研究を続けて『九州キリシタン新風土記』など多くの著作を発表した濱名志松氏の記念館である。今回は、父の資料を大切に守る濱名正光館長に協力を得て、未整理の文書類を中心に調査を進めた。天草には公立の博物館・資料館がたくさんあるが、その一方でこのように私立で運営される施設の存在も大きい。

昨年からの継続として、天草市立天草アーカイブズが所蔵する『みくに』や『天草毎日新聞』など、天草で発行されていたいわゆる「地域新聞」の写真撮影やマイクロフィルムによる閲覧を行った。昭和戦前期から戦後期にかけて、地域新聞は当地の情報・文化の拡充に大き

な意味を持っており、その内容を分析することが今後の研究にも役立つであろう。

③資料をつなぐ

交流班では、こちらも昨年に引き続き、天草市立本渡歴史民俗資料館所蔵の石本家資料に含まれる美術品調査を実施した。石本家は江戸時代後期に天草有数の豪商として知られ、長崎や大坂などとの交易により巨万の富を得た。現在、石本家文書は九州大学に寄贈されて文献史学からの研究が進められており、今回の調査で手がけた美術品の分析が期待される。古文書と美術品の研究成果を融合することで、新しい事実が明らかになることを目指している。



石本家資料

周辺を含めた天草調査の魅力

天草五橋で九州の宇土半島とつながる天草上島や八代海（不知火海）に面した地域は、歴史的変遷からも熊本側の影響を受けている。地域によっては長崎、あるいは鹿児島との緊密な接点も見出される。

牛深、御所浦島、棚底、御領、湯島を重点調査地に設定したことで、そのような独自の特色を有する各地の姿をしっかりとみてとれた。天草における食事はもちろん魚料理が中心だが、各地に移動するなかで、我々の口にする魚の種類はバラエティに富んでいる。これも独自文化を醸成するひとつの要素なのだろう。重点調査によって詳細な「地域の顔」を知ることができた。その一方で、天草諸島とつながる近接地域を含めた分析視角も必要になってくる。これも限られた時間ではあったが、鹿児島県出水郡長島町、熊本県宇城市を全体調査として訪問した。

長島は牛深からフェリーで30分の距離で結ばれる。現在は阿久根市との間に黒之瀬戸大橋が架けられて、九州とは陸続きになっている。この島は地理的には天草諸島に所属するが、戦国時代に薩摩の島津氏が領有したことから、以降は薩摩国、そして鹿児島県となったところだ。当地の資料閲覧やフィールドワークによって、天草との共通点、そして相違点も窺えた。

宇城市では、こちらも天草と目と鼻の先にある三角地区、そしてかつての商業港の松合地区を見学した。近代におけるこの地域のターミナルであった三角西港は、地元の人々によって世界遺産登録に向けた推進運動が展開されている。たしかに明治期の町並みを彷彿とさせる建物の数々は当地の文化の象徴ともいえる。

地域連携、そして文化交渉学の展開

ICISの天草フィールドワークを良い方向に導いてくれたのは、故郷を愛する地元の皆さんである。行く先々でインタビューをすると、歴史・文化の調査は必要だと誰もが思っている一方で、なかなか着手できない現状がある。かたや、ICISではこのような実地調査の経験から大学院生を育成し、将来の研究向上に結びつけようとしている。この両者の出会いは、非常に有意義なもので、全



地域交流講演会

国的にも調査のモデルケースとなるであろう。

天草とICISの連携は成果の共有というところでも深まりつつある。たとえば「関西大学地域交流講演会」と題して、調査期間中に地元住民との交流の機会を設けた。今年は鶴田文史氏（天草史談会代表）、平田豊弘氏（天草市教育委員会）のお二人に地元代表として演壇に立っていただき、ICISからは藪田貫教授、大学院生の王海氏が天草フィールドワークの成果発表を行った。一般の方々も多く、50名近い参加者を得た。

ICISの天草総合研究は実り多き調査を終えて、まとめの段階に入っている。参加メンバーを中心に今年も調査論文集を刊行する予定であり、この成果をもとに各自が今後の研究に邁進することが期待される。筆者の私見となるが、2年間に及ぶ天草調査で得たものは、多分野に関わる研究者が集う総合調査の重要性、そして新しい研究手法の模索、創造であった。これが文化交渉学の未来へつながる貴重な財産になったことは言うまでもない。

ICIS国際シンポジウム

「周縁と中心の概念で読み解く東アジアの『越・韓・琉』 —歴史学・考古学研究からの視座—

2011年10月1・2日、文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) 主催の国際シンポジウムが開催された。

関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) の研究アプローチの一つである「周縁の文化交渉」は、中国を取り巻く地域を「周縁」と見立て、その「周縁」からみた中国研究を主軸として進められてきた。これは関西大学における中国研究の蓄積をもとに、中国の地理的・文化的な中心性に注目したもので、その枠組みや研究の重要性は言うまでもない。だが中国における研究の深化と問題意識に基づく限り、その内容は常に「周縁の声なき東アジア論」となる危険性を孕んでいる。ICISの研究者はこうした問題意識を抱きつつ、ベトナム・韓国・沖縄の現地でそれぞれ国際学術会議を開催してきた (各概要はニュースレター7号に掲載)。本シンポジウムはこれらの総括として、周縁と中心(核)、中国文化とのかかわり、権力の三つをテーマに、前近代における越 (ベトナム)・韓 (韓国・朝鮮)・琉球 (沖縄) の歴史と文化の比較を通じて地域研究のダイナミズムを掘り起こし、東アジア論に結びつけることを目的に企画された。プログラムは三部 (政治、外交、物質文化) および総合討論で構成され、若手研究者をはじめ、歴史学・考古学における著名かつ多忙な先生方に参加いただいた。報告者とタイトルは、以下の通りである。



陶リーダーの開会挨拶

- チョン・ダハム (鄭多函、韓国漢陽大学校・HK教授) 『『小中華』の創出：15世紀における朝鮮の女真族と対馬島に向けた「敬差官」の派遣を中心に』
- 岡本弘道 (関西大学東西学術研究所・研究員、元ICIS-PD) 「近世琉球の国際的位置と対日・対清外交」

第三部 物質文化

- 西村昌也 (金沢大学国際文化資源学研究所・客員研究員、元ICIS助教) 「ベトナム形成史における“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム (チャンパ) と北部南域 (タインホア・ゲアン地方) の役割」
- ヤン・ジョンソク (梁正錫、韓国水原大学校・教授) 「古代東アジアにおける宮殿の系譜—高句麗と渤海を中心に—」
- 石井 龍太 (日本学術振興会特別研究員・PD) 「瓦と琉球—王権、制度、思想、交渉—」

第一部「政治」においては、まず桃木報告が各地域の「東アジア史」研究の問題点と越・韓・日 (・琉) の比較研究の重要性を指摘し、次に大越 (李朝、1009-1226) の地方支配のあり方を概観しつつ、特に高麗との比較の必要性を提起した。篠原報告は、4世紀～5世紀初の高句麗における支配イデオロギーの問題と6世紀における新羅の法制の議論を通じ、古代朝鮮における漢



第一部の質疑応答

化や国際秩序の多様性について述べた。豊見山報告は、「言上写」(下達文書) から近世琉球 (1609-1879) の内政構造を述べ、地方や遠隔離島に対する統一した統治方針が、18世紀初頭から明瞭となることを史料から論じた。コメンテータの李成市氏 (早稲田大学・教授) は、各報告が政治中心としての中国に対する地域中心のあり方を捉えたものと評価しつつ、特に制度面を中心としたコメントと批判、展望について述べた。

第一部 政治

- 桃木至朗 (大阪大学・教授) 「中世大越の地方支配～唐宋変革期「小帝国」の比較史への問題提起～」
- 篠原啓方 (ICIS・特別研究員) 「古代朝鮮の政治体制と国際認識—高句麗・新羅を中心に—」
- 豊見山和行 (琉球大学・教授) 「近世琉球の政治構造について一言上写・僉議・規模帳等を中心に—」

第二部 外交

- 清水太郎 (鳥取県立公文書館・専門員) 「ベトナム使節と朝鮮使節の中国での邂逅(6) —19世紀を中心として—」

第二部「外交」では、まず清水報告が19世紀を中心とするベトナム・朝鮮の使節間交流について、新資料を交えつつ、その変遷と意義を論じた。鄭報告は、女真や対馬に派遣された敬差官に見られる朝鮮の「小中華」意識が、既存の「事大」や「交隣」といった枠組みでは捉えがたいことを指摘した。岡本報告は近世琉球における明清との朝貢・冊封関係、島津氏・徳川幕府との従属関係が、外交的制約を課すと同時に琉球の存在意義を保障していたことを指摘しつつ、琉球の自律性を検討した。コメンテータの夫馬進氏（京都大学・教授）からは、底本や史料の用語、時期区分の概念、研究史など、詳細かつ鋭い指摘が出され、終了予定時刻を1時間も超過する白熱した議論が繰り広げられた。



第二部の質疑応答

二日目の第三部「物質文化」では、西村報告が銅鼓や陶磁器といったベトナム・中国の物質文化のあり方から、ベトナムの形成史におけるベトナム北部南域のキン族の役割を巨視的に論じた。梁報告は、高句麗・渤海の宮殿の建築構造と配置様式において、漢～隋唐から随時受容される要素と、高句麗以来の伝統的な要素という二つの系譜が存在することを指摘した。石井報告は、琉球諸島の瓦が韓半島、日本列



梁正錫氏

島、中国大陸部の瓦文化との交渉によって成立・発展し、また琉球王府による瓦生産・使用の独占が、所有者の社会的・経済的優位を示す装飾材としての意味と結びついていることを述べた。これに対しコメンテータの西谷正氏（九州歴史資料館・館長）は、豊富な知識をもとに、考古学の成果をはじめ、意匠や構造の解釈に関する質問や問題を提起した。



村井章介氏

総合討論では、総合コメンテータとして村井章介氏（東京大学・教授）から、中国ファクターの相対化とそれとは異なる参照系の定義、独自性という概念の危険性、文化圏という空間設定の難しさ、などが提起された。報告者は異なる時代や地域を研究対象としつつも、的確なコメントに導かれ、共通の問題意識を自身の興味に引きつけ、それぞれの所感や展望を述べた。

個人的にはたいへん有意義かつ刺激的な内容であり、多くの課題も見えてきた。ただ振り返ってみると、議論の目的が周縁の主体性のみを強調することだと受け止められていたような気がする。しかし本シンポジウムにとってはそうした議論はあくまで通過点であり、その成熟の次に見えてくる新たな東アジア像の模索を目指すのである。それは一度のシンポジウムや個人研究で解決し得るものではない。むしろそれゆえに、この試みが今後も持続可能であり、また必要であることを実感した。

最後となったが、同シンポジウムの趣旨を理解し、開催を快諾して下さったICISの先生方、関係者の方々に、深く感謝申し上げる。

篠原啓方（COE特別研究員）



記念撮影

東アジア文化交渉学会第3回年次大会

辛亥革命100周年記念国際シンポジウム 「辛亥革命とアジア」

2011年5月7・8日、東アジア文化交渉学会（Society for Cultural Interaction in East Asia）と華中師範大学中国近代史研究所の共同主催による東アジア文化交渉学会第3回年次大会ならびに辛亥革命100周年記念国際シンポジウム「辛亥革命とアジア」が中国・武漢の華中師範大学にて開催された。

中国、日本、韓国、アメリカ、カナダ、香港、台湾等の国と地域から60名余の学者が年次大会に参加し、研究発表を行った。



討論の様子1

今回の年次大会のメインテーマは、辛亥革命とアジアである。開会式では華中師範大学前学長、著名な歴史学者章開沅先生が「辛亥革命とアジアの未来」を題とする基調講演を行い、引き続きカリフォルニア州立大学サンディエゴ校のJoseph W. Esherick教授による「Reconsidering the 1911 Revolution」と題する講演が行われた。

二日にわたるシンポジウムは10のラウンドテーブルディスカッションが行われ、内容は以下の通りである。

1. 国際視野における辛亥革命
2. 辛亥革命の歴史遺産と現実的意義
3. 辛亥革命後の東アジア各国の相互認識

4. 革命時代の新概念
5. 西洋人によるアジア研究と中国語研究
6. 韓国の東アジア文化研究
7. 韓国の東アジア文学研究
8. 中国出土文献研究
9. 中日両国の相互認識と文化関係
10. 東アジアの国際関係と中国文化



討論の様子2

東アジア文化交渉学会の2011年度の会長に華中師範大学学長、著名な近代史研究者である馬敏教授が選ばれた。

東アジア文化交渉学会（Society for Cultural Interaction in East Asia）は、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）が中心になって発足された国際学会で、会員に世界各国320余名の学者が名前を連ねている。

沈国威（ICIS・教授）



記念撮影



RA活動報告 —ASCJ・WHAに参加して—

ASCJ 参加レポート 沈薇薇（文化交渉学教育研究拠点・RA）

2011年6月、ASCJ2011が国際基督教大学で開催された。ASCJ(Asian Studies Conference Japan)は、アジアに関する人文学研究の総合的な学会で、英語を使用言語とする。このASCJには、ICISは今回が五年目の参加となる。毎年ICIS内で参加者を募り、参加者は個人の研究課題に沿い、「文化交渉」というモットーのもと、異なる専攻領域の若手研究者と共通点を見いだしパネルを組む。参加審査を通過したパネルは、発表前の数ヶ月間、個々の研究を深化させるとともに、全員で事前練習を積み重ね本番を迎える。

ICISのメンバーとして、ASCJで発表するのは、私にとって二回目である。前回の発表の経験を踏まえ、慌てずに発表するつもりだったが、想定と異なり、予想外の出来事が多く発生した旅となった。

出発当日の朝、梅田行きの特急電車がなんと故障したのだ。交通手段を駆使し、ICISの参加者全員は無事に予定の新幹線に間に合った(教訓1:列車が定刻に動くことが有名な日本でも、交通状況に応じるため10~20分早めに出発した方がよい)。午後のパネルで発表した際、私のパワーポイントが作成した通りに動かず、一部の文字や

図が表示できなくなった(PPTを作成したソフトと、発表会場のアップル社のPCとが合わなかったのが、アクシデントの原因だと思われる)。幸い事前に20部程度のハンドアウトを用意してあったので、それをもとに発表を続け、事なきを得た(教訓2:PPTを使用する時、PDFのバックアップも用意した方がよい。教訓3:ハンドアウトが必要、命綱になる可能性がある)。最後に会場からいただいた寛大な拍手が忘れられないものとなった。

このようなハプニングがある意味スパイスになったのかもしれない。今回は前回より楽しめた。母語ではない英語で、日本の近代史に関する発表を行い、会場で質疑応答をこなすのは簡単ではなかった。約半年の準備期間も楽ではなかった。多くの先生方のご助力を得て、皆で困難を乗り越え、発表を成功させる事ができた。「自信がないのは準備が足りないからだ」と聞いたことがある。まさにその通りだ。物事は計画通りに行かない場合がよくある、事前準備をしっかりとっておけば、過程や結果のビジョンが明確になる。予想外の状況が発生しても、慌てず、すぐに問題を解決できる。それが「自信」だと思う。

WHA 参加レポート 稲垣智恵（文化交渉学教育研究拠点・RA）

2011年7月7日から10日にかけて、World History Association(世界歴史学会)主催によるThe 2011World History Association Conferenceが中国北京、首都師範大学に於いて行われた。本学会は今回で20周年を迎える学会で、今回の大会の参加者総数は300人を超える。日本人の参加者は少なく、参加者の多くが欧米、そして今回の会場が北京であるということもあり、中国からも相当数集まった。発表言語は英語で、それぞれ3-4人ごとのパネルに分けて行われるパネルディスカッションが主な発表形式である。

ICISからの参加者は7月8日・9日に発表を行った。私は同じくICIS所属の鄒双双氏、韓一瑾氏と共に9日に、「Sino-Japanese Language Synergies and Modern Chinese Identity: Impact of Translations, Neologisms, and Poetics from Periphery」と題したパネル発表に参加した。本パネルの司会者はJenine Heaton先生、コメンテーターは同じくJenine Heaton先生と周維宏先生である。

私は「Translation and the Introduction of Modern Thought to China: The Role of Lu Xun」のタイトルで発表を行った。

これは近代中国語の変化を魯迅の翻訳を通して述べたものであり、語学史という広い意味では歴史に含まれる内容ではあるが、現在私が研究しているのは歴史ではなく中国語学、それも文法よりの分野であるがために、実際、本学会に向けての準備中には様々な悩みが積み重なった。また、英語を用いたプレゼンテーションも今回が初めてで、プレゼンテーションどころか、英語を話すということすらままならない私にとっては、恥ずかしながら、ほとんどゼロからの出発であったと言える。そんな私ではあったが、陶・Heaton両先生のお力を借りてどうにか発表の形にすることができた。特に、Heaton先生には原稿のチェックから発音指導まで、授業時間外にも大変お世話になった。

今回の学会では、特に中国に関する歴史について、様々な背景を持つ研究者が意見を交換したが、「西洋(人)」を通じたアジア認識は、普段ほとんど語学の、それも日中二ヶ国の研究者が集まる学会しか参加したことなかった私にとっては非常に新鮮であり、今回の経験は、英語(或いは他の言語もそうだが)が出来れば更に多くの世界を知ることが出来るのだと改めて思う機会となった。

第5回 国際シンポジウム

2011年11月11日・12日の両日、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）において第5回国際シンポジウム「東アジア文化交渉学の新しい展望」が開催される。

開会の挨拶に続き、斯波義信氏（財団法人東洋文庫文庫長・大阪大学・名誉教授）と王曉秋氏（北京大学歴史系中外関係史研究所長）の両氏に関西大学名誉博士号が授与される。

続いて陶徳民氏（関西大学ICIS リーダー）によるICISにおける5年間の活動報告がなされ、斯波義信氏による基調講演「Japanese Study into the History of Maritime East Asia」、Joshua Fogel氏（York University）による記念講演「The Cold War and China in the United States」が行われる。

その後1日目の午後から、2日目に渡って3つのパネルに分かれて研究成果の報告が行われる。国内外の研究者による報告は次の通りである。

1 儒教の宗教性と書院ネットワークをめぐって

- ・黄進興（中央研究院歴史語言研究所長）
「研究儒教的反思」
 - ・吾妻重二（関西大学ICIS・大学院文学研究科長・東アジア文化研究科長）
「文化交渉学と東亜世界的書院」
 - ・徐興慶（国際日本文化研究センター外国人研究員・国立台湾大学日本語文学研究所・教授）
「東亜儒教、宗教観の轉換及其認同問題—以隱元、独立、心越禪師與朱舜水為例—」
 - ・二階堂善弘（関西大学ICISサブリーダー）
「關於民間寺廟祭孔的狀況—以閩台地區為主」
- コメンテータ：小島毅（東京大学大学院人文社会系研究科）

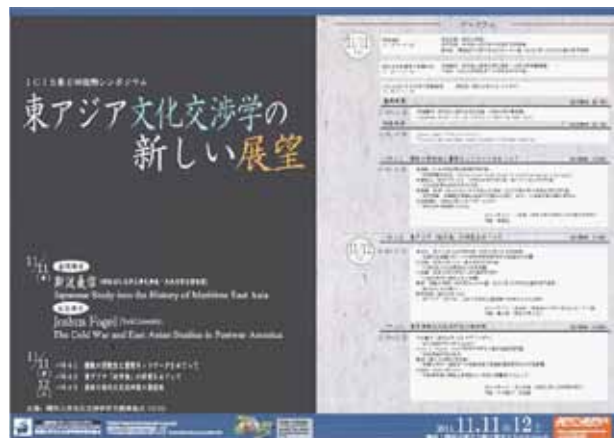
2 東アジア「地中海」の研究をめぐって

- ・葛兆光（復旦大学文史研究院長・関西大学COE客員教授）
「吳三桂豈是姜伯約？——清初李朝朝鮮君臣對吳三桂的觀察」
- ・松浦章（関西大学ICIS・東西学術研究所長）
「中国帆船による漂流民の本国帰還」

- ・小島毅（東京大学大学院人文社会系研究科）
「王安石学派の経学とその影響」
 - ・崔官（高麗大学校日本研究センター長・SCIEA第4回年次大会主催予定者）
「鄭成功から和籐内へ」
 - ・野間晴雄（関西大学ICIS）
「東アジア『地中海』における歴史生態基盤の地域性と文化交渉」
- コメンテータ：鄭培凱（香港城市大学中国文化センター長）

3 東西言語文化交流研究の最前線

- ・内田慶市（関西大学ICIS サブリーダー）
「域外漢語研究の新たな地平」
 - ・Irina F. Popova（ロシア科学アカデミー東洋文献研究所長）
「俄国漢語研究的概況」
 - ・章清（復旦大学歴史学部長）
「報章文体的“是與非”——略論晚清中国接納漢語新詞的曲折與影響」
 - ・沈国威（関西大学ICIS）
「辛亥革命期の新語と新概念—日本語の影響を中心として」
- コメンテータ：高田時雄（京都大学人文科学研究所）



氷野善寛（COE-DAC）
※記事執筆は10月末日

神サマたちの「越境」

宮嶋純子（文化交渉学教育研究拠点・PD）

「七福神」は、古くから日本で信仰されている、七柱の福の神である。特に正月には、七福神を祀る社寺を参拝してまわり、招福を祈願する「七福神めぐり」が全国各地で盛んにおこなわれる。我が家では毎年、成人の日におこなわれる京都泉涌寺の「七福神めぐり」に出かける。ここでは七福神を巡拝しながら各神にちなんだ縁起物を集めて福笹に付け持ち帰り、攘災招福のしるしとして一年間玄関先に飾っておくのである。

ところでこの七福神、実は出自はみなバラバラで、多国籍・多宗教の神々の集まりであることをご存じの方も多だろう。構成メンバーには諸説あるが、一般的には日本古来の神である恵比寿、インドのヒンドゥー教由来の神で仏教を經由して伝わった毘沙門天と弁財天、同じくインド由来の神と日本の大国主命が神仏習合した大黒天、中国の道教の神である福祿寿あるいは寿老人、唐代の伝説的仏僧の布袋と、バラエティに富んだ顔ぶれである。このような七柱の神サマたちが一艘の宝船に仲良く乗ってやって来れば、確かに沢山の幸せを運んでくれそうだ。

異国の神が祀られるのは、もちろん日本の七福神に限った話ではない。例えば関帝廟などは華僑の行くところ、すなわち世界各地に設けられ、現在では商業の神として華僑たちのみならず広く諸人の信仰を集めている。関帝廟は、日本では中華街の観光スポットとしても有名である。

関帝が、2世紀後半から3世紀にかけて実在した人物である関羽を神格化したものであることもまた有名であろう。正史『三国志』や小説『三国志演義』などでお馴染み、蜀漢の建国者劉備に仕えた忠義の將軍関羽は、その死後も民

間に高い人気を誇った。後世、関羽は武神として、あるいは出身地である山西地方の商人たちからは財神として祀られ、歴代王朝から神号を贈られて、今日に至るまで関帝信仰は隆盛を極めていく。

関羽とほぼ同時代、はるか南方の交州で活躍した士燮という人物がいた。『三国志』呉志所載の伝によれば、士燮は後漢末期から呉の時代にかけて40年余りの間、交趾（現在のベトナム北部）太守として半ば独立した政権を築き、呉主孫権から龍編侯に封じられている。士燮は若いころ後漢のみよこ洛陽で学問を修めており、その後交趾に赴任した。人柄は穏やかで謙虚、土地の人間にも慕われ、後世にはベトナムに文字や学問を伝え文明をもたらした「南交学祖」と見なされた。

士燮の廟は、ベトナムの首都ハノイの東方、バクニン（Bắc Ninh）省トゥアンタイン（Thuận Thành）県に現存する。そこはかつて彼が根拠地とした交趾郡の郡治龍編の地であり、「南交学祖」の額とともに士燮の像が大切に祀られている。ベトナム北部地域は士燮の死後も長期にわたって中国歴代王朝の統治下にあったが、反乱という名の独立運動も盛んに起こっていた。生前、中国側の支配者として君臨した士燮はやがてベトナム人とその土地の守護神となり、人々の精神的な拠りどころとなったのである。

かように、神々は自らの信奉者たちの手によって「越境」する。むろん越境とは、空間的なそれだけではない。武神から財神へといった神格の変容などもそのひとつである。こんど神仏に祈願する時は、願い事を述べるばかりでなく、かの神サマの辿ってきた長い越境の旅路に思いを馳せるのはどうだろう。きっとお喜びになるはずだ。

写真1：京都泉涌寺・七福神めぐりの福笹。古い笹は次の年に寺に納め、新しい福笹を頂いてくる。

写真2：横浜関帝廟は中華街のシンボリック的存在。

写真3：士燮の像は「南交学祖」の額とともに祀られている。



写真1



写真3



写真2

❖ 講演会

第32回創生部会：2011年7月1日

- * 周維宏（北京日本学研究中心・教授／中国日本史学会副会長）
「日本人のアジア観の変遷およびその外交に及ぼした影響」

COE客員教授講演会：2011年7月22日

- * 馬敏（関西大学COE客員教授／華中師範大学長）
「早期中英文化交流史中の幾個問題—以牛津浸禮會文獻為中心—」

❖ 出版物紹介

- * 荒武賢一郎／編

『近世史研究と現代社会』
（清文堂出版・2011年4月・263頁）

- * 荒武賢一郎・渡辺尚志／編

『近世後期大名の領政機構—信濃国松代藩地域の研究Ⅲ—』
（岩田書院・2011年5月・297頁）

- * 吾妻重二・小田淑子／編

『東アジアの宗教と思想』
（丸善出版・2011年9月・440頁）

- * 吾妻重二／編

『関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ9 泊園記念会創立50周年記念論文集』
（関西大学出版部・2011年10月・310頁）

❖ 人事異動

- * 2011年6月1日を以て、馬敏氏がCOE客員教授に着任、2011年7月31日を以て、離任した。
- * 2011年10月15日を以て、葛兆光氏がCOE客員教授に着任、2011年11月14日を以て、離任した。
- * 2011年6月15日を以て、岩城美佳氏がCOE-JAを離任した。
- * 2011年8月31日を以て、劉嬭氏がCOE-JAを離任した。
- * 2011年9月27日を以て、司佳氏がCOE-PDを離任した。
- * 2011年10月1日を以て、石田智子氏がCOE-RAに、羅丹氏がCOE-JAに着任した。
- * 2011年10月11日を以て、袁晨氏がCOE-JAに着任した。
- * 2011年10月14日を以て、王曉雨氏がCOE-RAに着任した。

関西大学大学院東アジア文化研究科 紀要原稿募集のお知らせ

関西大学大学院東アジア文化研究科では、紀要『東アジア文化交渉研究』(Journal of Cultural Interaction Studies in East Asia)の原稿を下記の要領で募集しております。応募いただいた原稿は、編集委員の査読により、掲載の可否を決定いたします。

(1) 原稿

東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他

(2) 使用言語

日本語：20,000字程度

中国語：20,000字程度

英語：4,000語程度

(3) 注意事項

(a) 英語による要旨を、150語程度で添付してください。

(b) 提出はワード文書でお願いいたします。

(c) 注は脚注方式でお願いいたします。

(d) 文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。

(e) 図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。

(4) 投稿原稿の二次利用としての電子化・公開につきましては、紀要掲載時点で執筆者が本拠点に承諾したものといたします。

(5) 提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学大学院

東アジア文化研究科

E-mail : jeac@ml.kandai.jp

編集後記

「Reflection」もこれが最終号である。文化交渉というテーマのもと行ってきたこのGCOE拠点における研究活動も今年度で一区切りとなる。ただ、それによって今まで築いてきたものが消えるわけではない。ここで作り上げられた研究成果や、人と人の出会い、そういうものは継続していく。そして、これからはスタートでもある。文化交渉という問題意識を持ちながら、どのように研究を続けていくのか、我々の「知」を今後も積み重ねていかねばならない。最後になったが、この2年間、ニューズレターの編集に協力して下さった皆様に御礼申し上げたい。色々な方にご助力によって、「Reflection」を無事に発行することができました。あつく御礼申し上げます。

(担当：池田智恵)

表紙写真について

クアラルンプールは不思議な街であった。私は研究の関係上、中国や香港、台湾の都市に赴くことは多いが、マレーシアの都市は初めてだった。この都市は、古いものと新しいものがごちゃ混ぜになって存在しており、懐かしさが漂う反面、ひどく現代的な顔を持っている。写真を撮って誰かに見せれば、きっと人によっては上海やバンコク、他の都市だと思うに違いない。

ただ、私が行ったことのあるアジアの都市にはない特徴がひとつ、インド文化の存在だ。写真はヒンドゥー寺院「スリ・マハ・マリアマン」である。チャイナタウンからほど近く、ぬっと突き出たきらびやかな彫刻の塔が目を引く。周りにはインド系の人々が、お参りしようと靴を脱ぐ姿が見える。そこから2、3分の距離に閩帝廟がある。閩帝廟の中には中華系の人々がお茶を片手におしゃべりしている。閩帝廟にお参りに行く人は、このヒンドゥー寺院には入らず、この寺院にお参りする人は、閩帝廟にはお参りしないに違いない。一つの都市に幾層かの文化が存在しているのを感じさせる光景だった。ただ旅行者だけが、その層を自由自在に跨いで廟と寺とを行き来するのだ。

クアラルンプールの人口は、マレー系、中華系、インド系の人々によって構成されているという。彼らは隣に存在する異文化に、日々何を感じるのだろうか。そして彼らが思い描く社会とはどんな姿なのだろう。そんなことに思いを馳せる旅となった。



[撮影：池田智恵]



Reflection 9

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日.. 2012年(平成24年)1月31日
発行.. 関西大学文化交渉学教育研究拠点

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 TEL06-69368006

E-Mail icis@mlkandai.jp URL <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>

関西大学文化交渉学教育研究拠点

ICIS

